

英語科教育法における、OPPシートを活用した内省で 批判的思考力を高める授業実践

明星大学教育学部教育学科 准教授 佐古孝義

Enhancing Critical Thinking Skills through Reflective Practices Utilizing the OPP Sheet in Teaching Methods Class

Takayoshi SAKO

抄録

英語科教育法の授業において、ワークショップを通じて学生に、「学習者の視点」と「教授者の視点」の双方の視点を体験させ、講義で解説される授業法や学習メカニズムを批判的に理解させる実践方法を提案する。この方法を支えるために、One Page Portfolio Assessment (OPPA) というアプローチを採用する。OPPシートの活用により、学生は自分の学習前後の変容を可視化でき、自発的な内省を深めることができる。

キーワード：OPPA（一枚ポートフォリオ評価）／教科教育法／内省

1. はじめに

筆者は、中学校・高等学校での英語科教員を18年務め、今年度(2023年度)より本学で教鞭を取らせていただくことになった。特に、2015年度からの8年間で国立の教員養成系大学の附属学校教員としてのべ100名程度の教育実習生を担当してきた経験を踏まえ、本学学生には、教育実習に臨む前に是非とも身につけておいてほしいことを、筆者が担当する「英語科教育法1、2」の授業の中に盛り込みたいと考えた。その身につけてほしいこととは、端的に言えば「体験を通じて学習者と教授者の立場を往還する」ことである。とはいえ、「中・高等学校教員養成課程外国語(英語)コア・カリキュラム」(東京学芸大学, 2017)によって教員養成段階で学ぶべき内容は体系的に示されており、限られた講義時間の中でその一つ一つを丁寧に解説し、学生にその意図を理解してもらうにはかなりの時間と工夫を要する。こうしたジレンマをいかに解消するかが筆者の直面した課題であった。

2. 本実践の概要

上記の課題解決にあたって筆者が考えた方法は、以下の3点である。

- ① 学生が講義前に持っている「学習者の視点」と講義後に獲得する「教授者の視点」を比較できる仕掛けを作る
- ② 講義内にワークショップの時間を設け、具体的な言語活動などを通じて上記の双方の視点を体験してもらう
- ③ 学生が②の体験をベースに、講義で解説される授業法や学習のメカニズムの具体的内容を批判的に咀嚼できるよう講義を構成すること

そのために筆者が採用したのが、自身が高等学校での「総合的な探究の時間」で使用していたOne Page Portfolio Assessment (以下OPPAと略記)である(具体的な授業については、佐古(2022)を参照)。OPPA

とは、学習の成果を学習者が一枚の用紙の中に、主として学習成果を学習前・中・後に履歴として記録し、その全体を学習者自身に自己評価させるものである(堀, 2019)。OPPAは、一般に初等中等教育において活用されるものとされていたが、近年は理学療法士養成(加藤, 2022)や教職大学院での活用(石田, 2023)など高等教育の場面でも実践例が登場してきており、特に田村(2022)による「英語科教育法」での活用事例などは本実践にも大いに参考になった。

3. OPPシートの説明

堀らが述べる通り、OPPシートには、学習に入る前と学習を終えた後に、同じ内容の学習全体を貫く「本質的な問い」が示され、学習の前後で書かれた記述を学習者自身が読み返すことで、自分の考えがどのように変容したのかを俯瞰できる(堀ほか, 2022)。また学習者自身がその回の授業にタイトルをつける欄が設けられていることも特徴であり、その授業回で何を学んだかについての内省が短時間で効果的に行える。筆者は、前期開講の「英語科教育法1」において、特に学習前後での変容を一望できる物理的な仕掛けに工夫を施して(方法について、堀ほか(2022)を参照)毎回の講義で1枚ずつ使用するとともに、学生にバインダーを配布し、一冊のファイルとして蓄積するよう求めた。

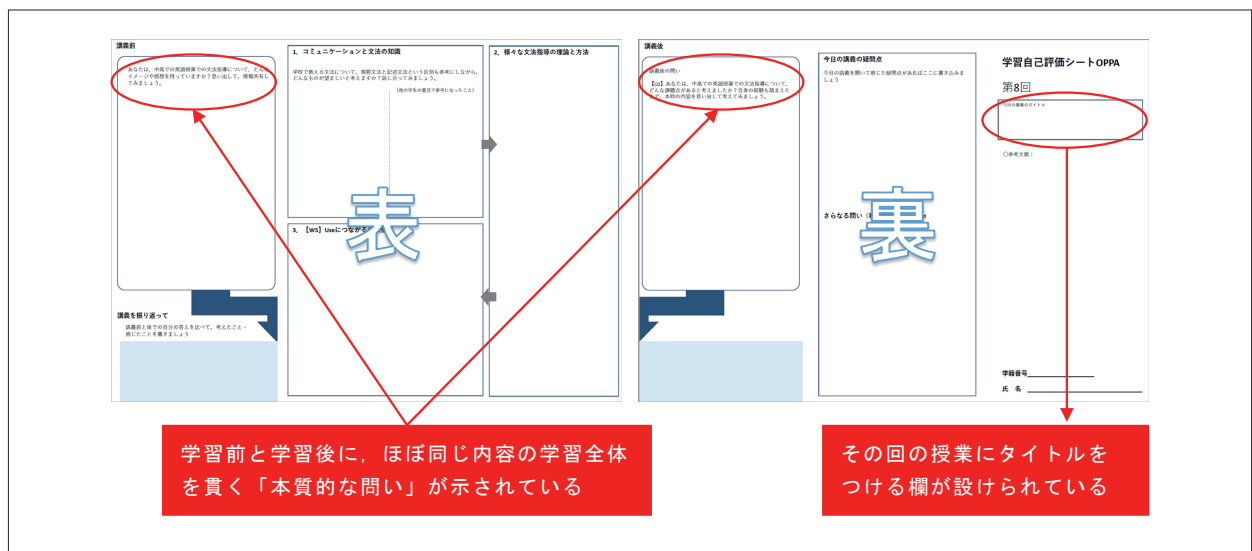


図1 OPPシート

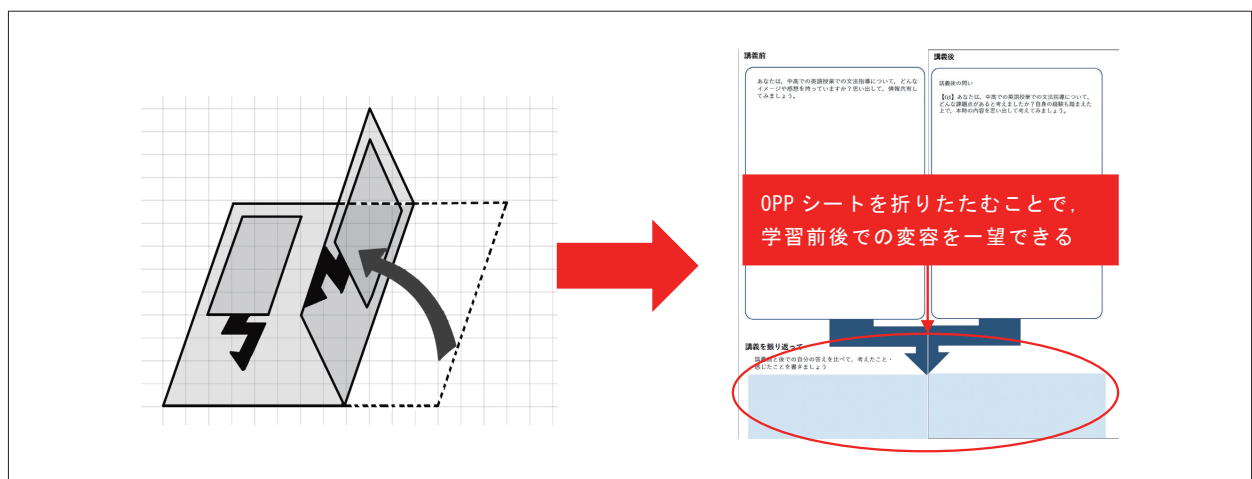


図2 OPPシートにおける工夫

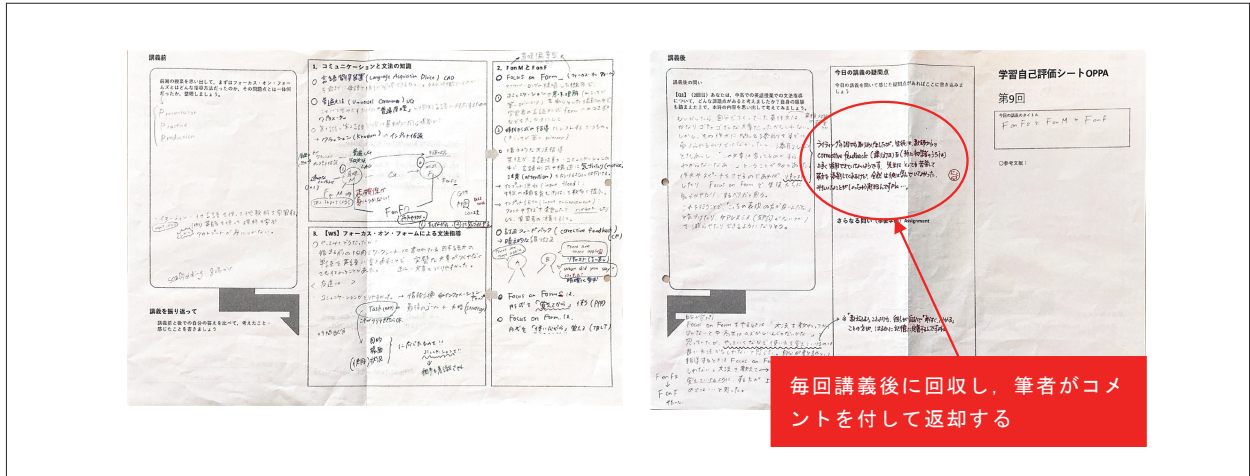


図3 学生の実際のOPPシート(例)

4. 受講生へのアンケート(有効回答数21)

前期授業の最終回で、受講生に以下の二つの質問について自由記述でのアンケートを実施した。

- ① この授業「英語科教育法1」について、自分が学んだこと、身につけたことを中心に、授業の感想を書いてください。
- ② この授業「英語科教育法1」を踏まえて、「こんな授業(内容)を自分で作りたい」とか「児童・生徒のこういう力を伸ばしてあげたい」や「英語教員になるにあたってこんな勉強をしておこう」などの観点で、模擬授業・教育実習を見据えて反省点を自由に書いてください。



図4 英語科教育法ファイル(OPPシートのポートフォリオ化)

5. 結果と考察

冒頭で述べた通り、教科教育法の授業の根幹になるのは、「学習者と教授者の立場を往還する」ことによって授業を組み立てる際の立体的な視点を獲得することにあると筆者は考えている。それは、複数の視点で授業を構築したり授業を分析したりすることが、教室にいるさまざまな習熟度の学習者による授業の受け止め方の違いを理解する上で前提となる姿勢であると思われるからである。このような〈視点の複数性〉や〈事態の多面的分析〉の重要性について、折に触れて講義内で押さえながら進めることはもちろん大切であるが、より理想的なのは、講義を受けている学生自身が内省の中で発見することだと考える。

講義終了後に学生に書いてもらったアンケートの回答(「」で示す)をもとに、改めてOPPシートを中心とした講義に込めた仕掛けとその効果を解題する。

- ① 「講義前の視点」(=今まで受けてきた授業を振り返りながら「学習者」目線で問題を考える)と「講義後の視点」(=「教授者」の立場で、どのような指導法や理念のもとに授業がどう組み立てられているかを学んだ後に同じ問題を考える)を並列し、俯瞰的に見直す。それによって学習者と教授者の立場の往還を物理的に可能にする。

「今まで自分は小中高と授業を受ける側としての知識や技能を教わり学習してきたが、大学で今学んでいることは教える側の立場であり、それを知ることによって当時の先生たちの大変さに気がついた。」

「この授業は、私が英語の学習者から教授者になるための大きな一歩になったと感じます。それぞれの立

場に立って英語教育について理解を深められたことによって、学習者の気持ちも加味しながらどう授業を展開していったら良いか、どう教えれば楽しく学べるかを広く学ぶことができてよかったです。」

- ② ワークショップ形式で授業中の言語活動を「学習者目線で」体験し、そこで感じたことや気づきをメタ的に「教授者目線で」記述し、その後のディスカッションを通して他の学生が得た気づきや考察と比較することで、その言語活動の意義や効果を理解する解像度が上がる

「個々の学びではなく、他者の学びを通して自分で説明する力、他者の多様な意見に触れる力を養なって(ママ)いきたい」

「他の人とも経験してきた英語学習を共有することで、新たな考えが生まれ、今後英語を指導するときどう授業を展開したいか考えるきっかけにもなった」

- ③ 講義を聞いていて感じた疑問点や反省を(どれほど不完全であれ)自分の言葉で言語化することで、「今自分は何が理解できていないのか」を可視化し、その反省を生かす方法を模索する

「教育学部に入って先生になるための勉強を始めてから先生って思ったよりも大変だなと思っていたが、この講義を受けてその考えがいつそう高まった。」

「改めて自分は英語が苦手な理由が少し見えてきたと思った。改めて英語が好きだと感じ、苦手だと感じた。だからそんな児童・生徒を減らせる授業ができるようになりたいです。」

- ④ これまでの自分の英語学習や、授業を受けてきた体験を、改めて意味づけ、整理することで「体験に裏打ちされた自分なりの授業スタイル」を考える礎を作る

「英語科教育法1を通して授業の作り方の基本を学ぶことができてとてもためになったし、楽しかったです。これまで受けてきた授業がどの点で良かったのか悪かったかを振り返りながら受けることが出来た。」

「自分は前期の英語科教育法1の授業を受けて、今まで自分が受けてきた英語の授業と結びつけながら、より良い英語の授業を作るための知識や技能を非常に多く身につけることができたため、自分を大きく成長させることができたと考えた」

「評価についても、自分の経験をもとに考えることができ、長所短所について考える必要があった。(原文ママ)」

- ⑤ 同じ教室空間で学ぶことが自分の考察をより進化/深化させるという経験が、今度は自分が作る授業にも応用される

「私はこの講義で『みんなで英語を学ぶ意義』というのを大切にしたいなと思うようになりました。」

憲法学者のレッシングは、行為を制約する4つの原理として法、社会規範、市場、アーキテクチャを挙げている(レッシング, 2001)。ここでいうアーキテクチャとは、操作可能な物理環境を指し、制約方法としては最も強力で独立性が高いものとされる。必ずしも人々がその存在を認知している必要がなく、主観化の度合いが制約の程度に影響を与えない、つまりアーキテクチャがしっかりとしていれば余計な指示をする必要性がない、ということの意味する。上述の教育的効果は、たとえ筆者が積極的に講義の中で内省の意義を説明しなくとも、「OPPシートを中軸に据えた講義の組み立て」というアーキテクチャにより、半ば自然に発生したと考えられるだろう。

本実践を通して何より筆者にとって喜ばしかったのは「複習(ママ)をしっかりとしたいと思いますし、このファイルはこれからも持っておきたいです。」や「ペアワーク、グループワークが多くて集中が途切れにくかったし、内容も自分のためになるものが多かったので楽しかった。」という声があったことであり、率直に講義ファイルやワークショップ形式の授業の意義を理解してくれた学生がいたことは今後の実践を

さらに進めていく上で大きな後押しとなっている。

参考文献

- 石田耕一. (2023). 「教職大学院における学修者の変容の把握：OPPA論をもとに」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』21, 81-88.
- 加藤研太郎. (2022). 「理学療法士の養成教育にOPPAを導入する意義について」『理学療法教育』1(1), 38-46.
- 佐古孝義. (2022). 「教科横断で論理的・批判的思考力を育てる」『英語教育』2022年12月号, 24-25, 大修館書店.
- 田村岳充. (2022). 「英語科教育法Ⅲにおける一枚ポートフォリオ評価(OPPA)の教育効果」『宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要』9, 683-687.
- 東京学芸大学. (2017). 「文部科学省委託事業『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』平成28年度報告書」2023年8月2日アクセス <https://www2.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/>
- 堀哲夫. (2019). 『新訂 一枚ポートフォリオ評価OPPA』東洋館出版社.
- 堀哲夫監修, 中島雅子編著. (2022). 『一枚ポートフォリオ評価論 OPPAでつくる授業』東洋館出版社.
- レッシング, ローレンス, 山形浩生他翻訳. (2001). 『CODE—インターネットの合法・違法・プライバシー』翔泳社.